# 平成17年度 決算報告

学校法人尚絅学園の平成17年度事業報告及び決算は、5月26日開催の評議員会ならびに理事会において承認されました。ここに、事業報告書と計算書類を掲載し、その概要を説明いたします。

## 事業報告書

1．平成17年度事業の概要について

○平成17年度は、常態となった大学文学部及び短期大学家政科改組の認可申請に注力すると同時に新学部のための校舎建設工事及び守衛室の改築を含む外構の整備工事を行うなど本学園にとっては学園運営上、また財務上においても一大事業を展開する年度となった。学生数の減少に歯止めをかけ、大学を中心とした学園の将来像を描く上においても有効かつ即効性のある施策と思われる。今後、新設学部及び改組した学科が継続的に学生募集に寄与することが期待されるところである。

(注(1)) 入件費依存率＝入件費／学生生徒等納付金　平成17年度に学生定員が充足されている場合は、学生生徒納付金収入は1,827,980千円となり、入件費依存率は、79.8%となる。

○大学文化言語学部の大幅な定員割れは当初から予想されていた。それは、文学部の改組が実質的には名称変更と1学部2学科体制を1学科体制にすると止まり、内容を質的に向上させ、特色を発揮させるまでには至らなかったことと、改組に際して採用した中国語と同文化、韓国語と同文化を担当する教員、英語系教員及び書道教員の資質等について充分なPRができなかったことに大きな要因がある。

○人件費が想定の範囲内ではあるとはいえ退職金の増加を主要因に前年比約1億2千万円の増加となったが、教育研究経費等支出面では支出抑制策が奏功したため、経常的な収支では一応堅調に推移し、予備費からの支出執行を行うこともなかった。その他、教育研究経費及び管理経費に関しては財務上、重大な影響を及ぼすであろう特筆すべき事業はなかった。しかしながら、教育研究経費の圧縮を強いられる状況は、教育研究機関としては、致命的な弱点であり、今後より一層の改革を推進し、特色に満ちた学園とすることで学生の確保に努めることが肝要である。

○新校舎(大学九品寺1号館)の事業費総額は、外構整備等の関連経費を含めて約15億円(注②参照)で建物、構築物、諸経費等それぞれの勘定科目に分散して計上している。会計上、特筆すべきは、建築資金が、自己資金(支払資金及び施設設備資金)によったため、学校法人会計基準による財務計算上、消費収支計算書においては建築費のほぼ全額が基本金組入額となり最終的に消費支出超過額が約10億8千万円となったことである。建設工事費の調達を自己資金によるか借入金によるかの判断については公認会計士に相談するなどした結果、実勢の預金金利及び将来的な金利の動向等からみて自己資金による方が得策であるとの判断にもとづくものである。

(注②) 工事費総額約15億円の内訳

①本体建設工事費 1,142百万円　②基本設計費及び工事監理費 25百万円　③音響関係他設備工事76百万円　(4)実験実習関係他備品工事費131百万円　⑤改修解体工事費47百万円　⑥守衛室新築費23百万円　⑦外構工事費53百万円　⑧植栽物移転他諸経費11百万円　(計 1,505百万円)

○人事面において17年度は18年4月の大学新学部(生活科学部)の設置及び短期大学家政科家政専攻の短大部総合生活学科への改組を視野に入事採用活動を行い、IT教育担当の教員を拡充するなど公募等の手段を併用しながら予定される教育カリキュラムに適合した教員採用をおこなった。また、事務職員の採用についても新学部を含む大学・短期大学部の事務を円滑ならしめるため大学事務の経験豊かな職員の採用に向け採用活動を行い、一定の成果を得ることができたと考えている。なお、大学・短大の教員採用に当っては、任期制を採用することとした。また、人事給与制度の欠陥を補うため人事制度委員会を組織し、答申を得るなど一定の進展をみることができたが、答申内容を検討し、実施するのは平成18年度以降となる。

2．主な事業計画の進捗状況(計画の達成状況)

(1) 人事給与制度改革

学外委員を含めた人事制度委員会を組織し、人事及び給与制度の改革を目指すこととなった。改革目標として掲げた事項のうち下記について答申を受け、平成18年度からの段階的実施に向けて執行体制を整備することとなった。

①熊本県給与条例からの脱却

②昇給停止年齢の引下げ

③早期退職優遇制度の実施

④60歳定年者の定年以降継続雇用の規程整備

⑤技能職・技術職の給与の在り方

⑥大学・短大教員の定年年齢の改正

⑦自己申告制度の創設

⑧管理職手当・役職手当の改正

(2) 大学の改革の状況

平成18年4月からの開設を前提に、大学に生活科学部栄養科学科を設置することを軸とし、人学文学部の文化言語学部への改組、短期大学を短期大学部とし、家政科家政専攻を総合生活学科へ、食物栄養専攻を食物栄養学科へ改組すべく設置申請し、設置及び改組関係については文部科学省、管理栄養士養成施設としては厚生労働省から認可されることとなった。

改革の第1段階を終えたところであるが、今後は、短期大学部4年制化を視野に入れた一層の充実と中・高等学校の改革について次の段階として準備をすすめつつある。

(3) 主なキャンパス施設整備計画の状況

イ．大学九品寺1号館本体建設工事費及び諸設備1,256,335千円(18/3月竣工)

ロ．大学新学部実験実習関係機器備品購入 110,250千円(18/2月納入)

ハ．西側塀及び正門周辺の改修整備工事 62,421千円(18/3月竣工)

ニ．旧短大第2校舎・第4校舎の解体工事 21,627千円(未着工)

ホ．第9校舎はACCP対応改装工事(1F) 21,331千円(17/9月竣工)

ヘ．守衛室改築工事　20,685千円(17/5月竣工)

ト．学生食堂のテーブル等備品購入 4,442千円(18/3月納入)

チ．附属幼稚園本舎侵入防護フェンス・門扉工事　3,990千円(17/8月竣工)

リ．九品寺キャンパスサーバー室構築工事 3,460千円(17/9月竣工)

ヌ．短大事務室改修工事　2,940千円(18/3月竣工)

ル．短大1号館調理室ガスオーブンレンジ取替工事2,310千円(17/8月竣工)

ヲ．情報処理教室関係パソコン等更新設置(リース契約による)

(1)楡木キャンパス　パソコン等90台更新　総額 27,400千円(4年リース)

②九品寺キャンパス　パソコン等66台更新　総額21,045千円(4年リース)

(3)高等学校　パソコン等46台更新　総額 17,745千円(5年リース)

1.決算

学校法人は文部省令(第18号)による「学校法人会計基準」に従って会計処理を行っています。平成17年度決算について同基準に定められている「消費収支計算書」、「資金収支計算書」、「貸借対照表」の内訳概要を公開いたします。

•消費収支計算書

この計算書類は経営の状況を表すものです。学園全体での消費収入合計は10億2552万円ですが、この額は帰属収入合計21億8243万円から自己資金で取得した資産等に対応する基本金組入額11億5691万円を差し引いたものです。一方、消費支出は学園全計で21億709万円となりました。九品寺1号館を自己資金により建築したことで多額の基本金組入れが発生したため、当年度の消費収支の差は10億8157万円の支出超過になりました。

•資金収支計算書

この計算書類は当年度の収入支出の他に、次年度以降の収入や支出を含めたあらゆる収支を網羅しているもので、学園全体での収支総額は12億2737万円となっています。なお、次年度繰越支払資金は7億1946万円となりました。

•貸借対照表

この表は期末における学園の財政状態を表しています。学園全体での資産の部合計は126億150万円となり、前年度との比較で1億151万円増加いたしました。負債の部合計は19億4563万円となり、前年度との比較で2617万円増加いたしました。



## 尚絅学園史

# 二つの「尚絅」の額(前)

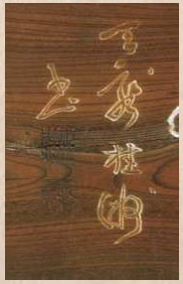
尚絅高校には、嘗て「尚絅」の文字が刻まれた木額と墨蹟の二つの額が掲げられていました。

平成七年四月、尚絅中学校が復活しました。その時に、昭和六年に昭和天皇が本校に行幸されたことを記念して建てられた「行幸記念館」を取り壊して、五階建ての校舎が新築されました。その前年に、笠美雄常務理事から山川正邦教諭と筆者に新生尚絅中学校の建物に相応しい書画が高校にないかと問い合わせがありました。書は、故津川桂子教諭にお願いをしました。絵画は、山川教諭と筆者が相談して、宇野千里氏の「開かずの門」(体育館に架蔵)、真道黎明氏の「蘭」(校史資料室保管)を貸出すことにしました。これらの作品は、第五代光島賢正校長(初代理事長、尚絅短期大学創立者で初代学長)が生徒の情操を育てる意味から蒐集したものでした。さて、これに加えて、校史資料室で保管していた「尚絅」の木額を中学校校長室前に架設することになりました。

この木額の文字は、桂洲道倫(一七一四～一七九四)が書いたものです。彼は、夢窓疎石が開いた京都嵯峨にある臨済宗天龍寺の第二百二十一代の住持でした。彼の生きた時代は、江戸幕府八代将軍徳川吉宗の享保の改革、老中松平定信の寛政の改革などが行われ、幕府の転換期でした。では、なぜ桂洲道倫の書いた木額が本校にあるのでしょうか。

ここに高田露という人物が登場します。高田は、熊本藩士で嘉永七(一八五四)年に熊本市千反畑で生まれました。藩校時習館に入校し、後に竹添進一郎の門人となりました。明治四(一八七一)年、藩命で大阪兵学寮に入り、七(一八七四)年、台湾出兵に参加したあと、帰郷し、楠木学校で民権思想を学びました。十(一八七七)年におこった西南戦争では協同隊を組織して、嚮導役、つまり西郷軍の道案内役を務め、ともに戦いました。同年八月、官軍に下り、投獄(禁固刑)されましたが、三年で特赦にあずかり、釈放されました。蛇足ですが、高田は「民謡「田原坂」で歌われた「馬上ゆたかな美少年」のモデルの一人に比定されています。帰郷後、相愛社に入り、民権運動、国会開設運動と奔走しました。三十五(一九〇二)年、衆議院議員選挙に政友会から当選し、四期議員をつとめ、大正四(一九一五)年に六十二歳でなくなりました。

この高田が休暇を利用して対馬で捕鯨を愉しんだ時に、偶然見つけたのが木彫の「尚絅」という額でした。当時は、丁度尚絅女学校創立の頃で、姪の永屋つる子さん(明治二十八年卒)が尚絅校に在校していました。高田は、この額を持ち帰り、永屋さんに「あんたの学校に丁度ええもんば見つけて来た。学校に持って行きなはり。内藤(儀十郎)先生の喜びなはるばい」と言いました。それで、永屋さんは、叔父高田の意を受けて、内藤校長への贈り物の重い額を抱えて、白坪町から人力車に乗って学校へ行きました。そして、高田の話を内藤校長へ伝えて、この木額を寄贈しました。内藤校長はすぐにこれを正面玄関に掲げました。熊本県は政争の激しい土地柄で、その頃は改進党・国権党が対立していました。尚絅校創立者の佐々友房は国権党の領袖でした。内藤もまた佐々と主義を同じしていました。高田はと言えば、これは改進党の重鎮でした。しかし、私人としては、このような交流があったのでした。この後、「尚絅」の木額はいつも、正面の玄関に掲げられ、幾多の教職員・同窓生がこれを見たものでした。



○真道黎明　宇土市出身　本名重彦　明治二(一八九七)年～昭和五三(一九七八)年。日本画家。堅山南風に師事。横山大観から指導を受ける。昭和六(一九三一)年第四回院展(日本美術院主催の展覧会)「桐の花」初入選。五〇(一九七五)年第六〇回院展「柿右衛門人造」総理大臣賞受賞。

○夢窓疎石　鎌倉時代末から室町時代初期にかけての臨済宗の禅僧。足利尊氏らが帰依する。尊氏は後醍醐天皇らの霊魂を弔うため、疎石の勧めで全国に安国寺を建立した。

○楠木学校・協同隊　明治八(一八七五)年四月、城下・城北の若者が自由民権運動を唱え起こした学校。ルソーの「民約論」を教典とし、ミルなどの西欧の先進的な学問を学んだ。進歩主義により反明治政府の立場をとり西南戦争では「熊本協同隊」を結成して薩軍に加わった。